様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2022
課題番号：１５Ｋ０２７８６

研究課題名（和文）日本とアジア圏の英語学習者のパフォーマンス能力：モノローグでの多言語比較研究

研究課題名（英文）Oral Performance of Asian University Students: Comparisons between L1 and L2 in Monologue Tests

研究代表者
蓬莱　朋子（Horai, Tomoko）

信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授

研究者番号：４０５４８０１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の実態調査において、中国・韓国・日本では、学校教育内で口述試験を母語でほとんど実施されていないことが明らかになった。この教育背景が及ぼす英語スピーキングテストのモノローグタスクへの影響を調査するために、母語と英語によるタスク遂行時の認知プロセスを検証した。質問紙において出身国間で5%水準で統計的な有意差が確認された5項目について、日本の被験者は中国・韓国の被験者に比べ、母語、英語ともに自己評価が低い。また、2言語間での比較では、発話の計画時と、発話中に関する5項目については、母語においても言語処理が複雑である可能性も示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、世界的規模で実施される英語運用評価試験(IELTS, iBT TOEFL等）に含まれるスピーキングテストで採用されているタスクの一つ「モノローグ」に着目し、受験者の出身国における学校教育での試験形式（e.g.筆記、口述試験）と、モノローグタスク遂行時の母語と英語での認知プロセスとの関連性を検証した。特に中国・韓国・日本の試験・評価方法について考証し、アジアでも試験結果の重要性が高いテスト(high-stakes tests)において、「モノローグ」タスクを使用することの妥当性を検討することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：In the survey for this study, it was found that oral tests are rarely administered in the native language during school education in China, Korea, and Japan. In order to investigate the effect of this educational background on the monologue task of high-stakes English speaking tests, we examined cognitive processes during task performance in the native language (L1) and English (L2). Japanese subjects rated themselves lower than Chinese and Korean subjects in both their L1 and L2 on 5 items in a post-test questionnaire for which statistically significant differences were found ($p < 0.05$) between countries of origin. In addition, the responses of all subjects to a further 5 items related to both the planning and speaking phases of the task, suggested that the language processing required was demanding even in the L1.

研究分野：言語テスト

キーワード：言語テスト　応用言語学　英語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

英語を外国語として学習する者を対象として世界的規模で実施される英語運用能力評価試験(International English Language Testing Systems [IELTS]、Cambridge English Qualifications [ケンブリッジ英検]、TOEFL iBT、TOEIC Speaking Test 等)には、「英語を話す能力」を測るパフォーマンス・テスト(以下、スピーキングテスト）が含まれている。これらのテストには、受験者が一人で一定の時間（1 分から 2 分間）話し続ける「モノローグ」タスクが採用されている。そのうち IELTS は 130 か国で実施され、受験者数は世界最大級(ブリティッシュ・カウンシル、2014)であり年間 220 万人に及ぶが、それぞれが受けた学校教育で外国語科目以外の教科に口述試験を課すヨーロッパ（e.g.イタリア、ドイツ、オランダ等）の英語学習者と、筆記試験を中心とするアジア（e.g. 日本）の英語学習者が、英語スピーキングテストを口述試験形式で受験するという現状がある。しかしながら、受験者の出身国の教育システム、試験方法の違いや母語においても口述試験への慣れ･不慣れがある中で､英語のスピーキングテストが、全受験者に同一形式で実施されていることへの妥当性についての調査は、言語テスト（Language Testing）の分野で未だ検証されていない研究領域である。

２．研究の目的

本研究では、世界的規模で実施される英語運用能力評価試験(IELTS、TOEFL iBT 等）に含まれるスピーキングテストで採用されているタスクの一つ「モノローグ」に着目する。受験者の出身国（中国、韓国、日本）における学校教育での試験形式（e.g.筆記試験)、母語での口述試験やプレゼンテーション（以下、口述試験）の経験を比較するとともに、英語スピーキングテストでのモノローグ遂行時に、話者の使用する言語が母語（L1）と外国語としての英語（L2）の場合とでは、認知プロセスにどのような違いがあるのかを検証するものである。

３．研究の方法

(1) スピーキングテスト環境下での母語と英語による「モノローグ」における認知プロセスの解明

① 母国語と英語による「モノローグ」の発話

IDP:IELTS Australia、Cambridge Assessment English、British Council の 3 団体が共同開発し、世界的規模で実施される英語運用能力評価試験 IELTS のスピーキングテストで使用される「モノローグ」タスクの中で、難易度が同レベルのものを質的・量的に実証した 4 つの異なるトピック(O’Sullivan, Weir and Horai, 2006)を用いる。一人の被験者は、2 つのトピックを母語で､他の 2 つのトピックを英語で話す｡(順序効果への対策としてカウンタバランスを取る。) IELTS 本試験と同じ状況下（準備時間 1 分間、モノローグ 2 分間）で実施した。

トピックは、次の通りである。1.(母語) Describe an enjoyable event that you experienced when you were at school. 2. (母語)Describe a film or a TV program which made a strong impression on you. 3. (英語)Describe a teacher who has influenced you in your education. 4. (英語)Describe a part-time/ holiday job that you have done.

② 認知プロセスの解明のための質問紙調査

被験者のスピーキングテストにおける<u>発話の計画開始前</u>、<u>発話の計画時</u>、<u>発話中</u>の認知プロセスを検証するために、「スピーキングテストにおける認知フレームワークモデル」(Weir, 2005)を基に作成した質問紙(Horai, 2009)を使用した。質問は、発話の計画開始前について 8 項目、発話の計画時について 16 項目、発話中について 14 項目から成り、被験者には「全くそう思わない[1]」から「強くそう思う[5]」の 5 段階のリッカート尺度での回答を求めた。

質問紙への回答は、(1)①において被験者が各トピック、2 分間のモノローグ終了後、合計 4 回依頼した。

③ 分析

-1. 母語によるモノローグにおける認知プロセス：出身国別被験者間の比較
-2. 英語によるモノローグにおける認知プロセス：出身国別被験者間の比較
-3. モノローグタスクにおける認知プロセス：2 言語間（母語・英語）の比較

(2)中国、韓国、日本における試験形式に関する調査

①被験者の出身国(中国･韓国)の教育システム、試験形式に関する質問紙への回答依頼とインタビューの実施

②電子メールによるアンケートの実施（日本の試験形式に関する実態調査)

当初は、対面で被験者から質問紙とインタビューによる回答を得ることを予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、被験者との対面によるデータ収集が困難になったため、電子メールによるアンケート実施に切り替えた。

４．研究成果

(1) スピーキングテスト環境下での母語と英語による「モノローグ」における認知プロセスの解明

当初は、中国、韓国、日本の 3 者間比較を予定していたが、新型コロナウイルス感染症に関する水際対策の強化に係る措置により、留学生の入国に制限が出たため、被験者を十分に確保することが困難になった。そこで、中国・韓国（以下、中韓グループ）と日本（以下、日本グループ）の 2 グループでの比較を行うこととした。

分析については、中韓グループと日本グループの間に差があることを確認するため、マン・ホイットニーの U 検定を行った。

① 母語によるモノローグにおける認知プロセス：国別被験者間の比較

中韓グループと日本グループの間には、母語によるモノローグタスク遂行時の認知プロセスでは質問紙 38 項目中、35 項目に統計的有意差は確認されなかった。有意差が見られたのは、各トピックにおいて、以下の 3 項目である。

発話の計画開始前に 5%水準で有意差が認められたものは、「このタイプのトピックについてどのようなスピーチをすればよいか知っている。」の項目において、トピック１ (U=23.000, p=.046)と、トピック 2. (U=15.000, p=.004)である。

発話の計画時に関する項目、「スピーチのアウトラインを計画する前に、スピーチに対するほとんどのアイディアが思い浮かんでいた。」では、トピック 2 において 5%水準で有意差が見られた。(U=26.000, p=.043) 中韓グループは「そう思う」の選択数が最多(70%)であり、日本グループは「そう思わない」が最多(45%)であった。

発話中に関する項目、「アイディアを順序よくまとめることは簡単だと思った。」では、トピック 2 において、5%水準で有意差が見られた。(U=21.500, p=.016) 中韓グループは「そう思う」の選択数が最多であった (70%) のに対し、日本グループは「全くそう思わない」「そう思わない」が 64%を占めた。

② 英語によるモノローグにおける認知プロセス：国別被験者間の比較

中韓グループと日本グループの間には、英語によるモノローグタスク遂行時の認知プロセスでは質問紙 38 項目中、35 項目では統計的有意差は確認されなかった。有意差が見られたのは、各トピックにおいて、以下の 3 項目である。

②-1. トピック 3.

発話の計画時に関する項目、「アイディアや内容を順序よくまとめることができた。」では、1%水準で有意差が見られた。(U=15.500, p=.004) 中韓グループは、「そうは思わない」から「強くそう思う」の 4 尺度に選択が分かれたが、日本グループは「そうは思わない」、「全くそうは思わない」を 91%が選択した。

発話中に関する項目、「このタスクを完成させることは簡単だと思った。」では、5%水準で有意差が見られた。(U=25.500, p=.036) 中韓グループは、「全くそう思わない」を 10%が、「そう思わない」を 50%が選択したが、日本グループは 73%が「全くそう思わない」を選択した。

②-2. トピック 4.

発話の計画時に関する項目、「アイディアや内容を順序よくまとめることができた。」では、5%水準で有意差が見られた。(U=23.500, p=.046) 中韓グループは、「そうは思わない」を 44%が選択し、「そう思う」を 33%が選択した。しかし、日本グループは 45%が「全くそう思わない」を、27%が「そうは思わない」を選択した。

発話中に関する項目、「文を論理的な順序で並べることができた。」では、5%水準で有意差が見られた。(U=25.500, p=.036) 中韓グループは、10%が「全くそう思わない」を、40%が「そうは思わない」を選択したのに対し、日本グループは 27%が「全くそう思わない」を、73%が「そうは思わない」を選択した。

③ モノローグタスクにおける認知プロセス：2 言語間（母語・英語）の比較

アジアの英語学習者における認知プロセスの特徴をみるために、母語でのモノローグタスク・グループ（以下、母語）、英語でのモノローグタスク・グループ（以下、英語）の 2 グループでの比較を行った。

分析については、両グループの間に差があることを確認するため、マン・ホイットニーの U 検定を行った。

③-1. 発話の計画開始前の項目には、母語と英語に統計的有意な差は見られなかった。

③-2. 発話の計画時に関する項目では、以下の項目で母語と英語に統計的な有意差が見られた。
8. 「スピーチのメモは英語でのみ取った。」(1%水準)(U=1153.500, p=.002)
9. 「スピーチのメモは母語でのみ取った。」(1%水準)(U=343.500, p<.001)
この結果から、タスクで指定された発話時の言語に合わせて、メモを取る際の言語を使い分けていることがわかる。

13.「最初に思い浮かべていたアイディアは全て話した。」(1%水準)(U=485.500, p<.001)
母語では、「強くそう思う」「そう思う」を 85%が選択しているが、英語では「強くそう思う」から「全くそう思わない」の 5 尺度に分散した。

14.「アイディアや内容を順序よくまとめることができた。」(5%水準)(U=572.500, p=.010)
母語では、「そう思う」を選択したものが最多の 39%であったが、34%は「そう思わない」、「全くそう思わない」を選択した。つまり、母語でもこの処理については難しいと考えられる。英語では「そう思わない」を選択したものが一番多く、37%であった。「全くそう思わない」も 24%と 2 番目に多い選択であった。

③-3. 発話中に関する項目では、14 項目中 8 項目で母語と英語に統計的に有意差が見られた。(1%水準で 6 項目、5%水準で 2 項目)
1.「アイディアを順序良くまとめることは簡単だと思った。」(U=558.000, p=.004)
2.「ふさわしい言葉を使ってアイディアを表現することができた。」(U=511.500, p=.001)(図 1)
3.「正しい文法を使ってアイディアを表現することができた。」(U=471.000, p<.001)
6.「文を論理的な順序で並べることができた。」(U=629.500, p=.025)
7.「スピーチ全体で、自分のアイディアをスムースにつなげることができた。」(U=460.500, p<.001)
10.「このスピーチをしながら、内容や順番が正確かどうかをモニターした。」(U=598.500, p=.012)
11.「このスピーチをしながら、内容や順番がこのトピックに対してふさわしいかどうかをモニターした。」(U=573.500, p=.005)

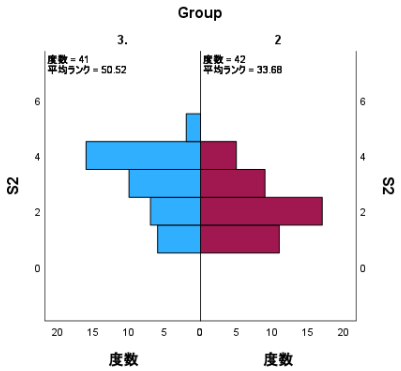

図 1 (1)③質問紙 (発話中)項目 2.
マン・ホイットニーの U 検定の結果
左：母語、右：英語
1:全くそう思わない
5:強くそう思う

14.「このタスクを完成させることは簡単だと思った。」(U=509.000, p<.001)
発話中の 8 項目の中で、1、6、7、14 については、母語でも 41%から 49%が「そう思わない」「全くそうは思わない」を選択している。これらの処理は、母語でも複雑である可能性が考えられる。

(2) 中国、韓国、日本における試験形式に関する調査
① 被験者の出身国(中国・韓国)の教育システム、初等・中等・高等教育及び、学校外での教員との面接試験、または教員・クラスメートの前でのプレゼンテーション(以下、口述試験)に関する質問紙への回答依頼とインタビューの実施と集計を行った。
＜中国＞
被験者が通う小学校、中学校においては、口述試験はなかった。
高校：国語
＜韓国＞
初等・中等教育にて口述試験を経験していない被験者がいた。受験経験のある被験者の教育機関での実施教科件数も少なかったが、大学入試（外国人留学生入試）と留学先の高等教育機関において口述試験の機会が増えている。
小学校：美術、体育、音楽、国語、英語
中学校：英語、音楽、数学、歴史、中国語、社会、国語（音読）、理科
高校：英語、日本語、数学、化学、国語（音読）、音楽
大学：大学入試（外国人留学入試）、ゼミ、英語、日本語、中国語、数学、キャリア教育

② 日本の大学生を対象に初等・中等・高等教育及び、学校外での教員との面接試験、または教員・クラスメートの前でのプレゼンテーション(以下、口述試験)に関する実態調査の集計・分析を行った。
口頭試験の経験がある日本人大学生 60 名の回答結果から、学校教育では、中学校以降での口述試験実施教科の第 1 位が「英語」で、中学校(42%)、高等学校(54%)・大学(54%)が受験している。第 2 位が「国語」で、小学校(14%)、中学校(14%)、高校(8%)、大学(2%)、第 3 位以降として他教科での日本語による口述試験は小学校で 6 教科[美術、算数、社会、科学、地理、社会科学(2-4%)]、中学校で 9 教科[美術、物理、数学、科学、歴史、生物、公民、地理、社会科学

(2-6%)]、高校で 13 教科[数学、物理、科学、コンピューターサイエンス、社会科学、生物、化学、地理、歴史、文学、芸術、地球科学、グローバルスタディ(2-8%)]、大学で 10 科目[教養ゼミ、第二外国語、社会科学、芸術、人類学、物理、文学、法律、経済学、教職(2-8%)]であり、母語での発表機会は減少する。学校外での日本語による主たる口述試験は、入学試験（中学、高校、大学）での面接であった。この調査から、学校教育内における口述試験は、日本語ではほとんど実施されていないことが明らかになった。

(3) まとめ

本研究の実態調査において、中国・韓国・日本では、学校教育内で口述試験を母語でほとんど実施されていないことが示された。そこで、スピーキングテストにおけるモノローグタスク遂行時の認知プロセスを解明するため、被験者を中国・韓国グループと日本グループ間に分け、母語でのモノローグ、英語でのモノローグを発話後、質問紙調査を実施した。38 項目中、35 項目においていずれの言語でも、タスク遂行時の認知プロセスでは、2 グループ間に統計的な有意差は確認されなかった。しかし、有意差が見られた項目においては、日本グループは母語においてもタスクのトピックに対して、どのようなスピーチすればよいか確信が持てていない、母語の発話前でもアイディアが十分でなかったことがうかがえる。また母語のタスクで、日本グループは、「アイディアや内容を順序良くまとめること」について、中韓グループよりも有意に自己評価が低いといえる。さらに、英語でのタスクにおいても、日本グループは、「アイディアや内容を順序よくまとめること」、「タスクの完成度」、「文を論理的な順序で話したこと」について、中韓グループよりも有意に自己評価が低いといえる。

「モノローグ」タスクを遂行する際の 2 言語間（母語と英語）での認知プロセスの比較では、発話の計画開始前の項目には、母語と英語に統計的有意な差は見られず、発話の計画時に関する項目では、母語でも英語でも処理が難しいと思われる項目に、14.「アイディアや内容を順序よくまとめることができた。」が挙げられる。発話中に関する項目では、14 項目中 8 項目において 2 言語間に 5%水準で統計的に有意差が見られたが、その 8 項目の中のうち、4 項目においては、発話中の言語処理が母語でも複雑である可能性が考えられる。

〈参考文献〉

Horai, T. (2009) Intra-task comparison in a monologic oral performance test: the impact of task manipulation on performance. In Brown, A. and Hill, K. (Eds.) Tasks and Criteria in Performance Assessment (pp.23-42). Frankfurt: Peter Lang.

Levelt, W.J.M. (1993) Speaking: From Intention to Articulation. Cambridge, M.A.: MIT Press.

O'Sullivan, B., Weir,C. and Horai, T. (2006) Exploring difficulty in speaking tasks: an intra-task perspective. In McGovern, P. and Walsh, S. (Eds.) IELTS Research Reports, Vol. 6 (pp. 119-160). Canberra: IELTS Australia.

Weir, C. (2005) Language Testing and Validation. London, Palgrave.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関